

令和5年度 幼保小連携推進園・校報告書 船越幼稚園・船越小学校

1 学校の課題

本校には、複雑な家庭環境等により、生活リズムが整わない、学習道具が揃わない等の様々な課題をもち、支援・援助を必要とする児童が多く在籍している。規範意識が低かったり、人との関わり方や気持ちのコントロールに課題があったりして、集団生活や一斉指導になじめない児童も増加傾向にある。そのため、授業に集中できず、学びから逃避する児童も少なくない。

本園では、家庭で保護者からゆったりと関わってもらっている幼児が多く、その安心感を土台に園生活を送っている姿が多く見られる。しかし、経験の少ない活動に戸惑う姿や、園児数の減少により、集団の中で遊んだり、その中で自分の思いを十分に表出したりするところに課題が見られる。

教職員の連携においては、令和4年度は派遣教諭が中心となり、隣接する両者の懸け橋となり働きかけたため、形式的ではない実質的・有効的な連携が図れるようになってきた。しかし、「幼保小連携は、年長や1年生担任が担うもの」という認識も少なからず残っており、園・校全体で幼保小連携を意識して取り組むことには難しさも残る。

2 研究主題

やりたい・できるをつなぐために ～自立心と協同性を大切に～

3 取組内容

○ 昨年度は、幼保小連携を進めていく上で、まずは互いの教育や保育について理解する必要があると考え、「知る」をテーマに交流や研修会といった様々な取組を行った。今年度はさらに、昨年度までの取組に加え、年長や1年生担任だけでなく、どの発達段階、どの学年においても子供たちの育ちや学びをつなげていくことが幼保小連携を一層深めると捉え、「みんなで」をテーマに取組を進めた。

(1) 小学校みんなで進めるための取組

① 研究主題の設定

「みんなで」取り組むことができるように、以下の点に留意して研究主題の設定を行った。

- ・ どの学年も取り組むことができるものにする。
- ・ 本校の実態を見つめ、課題の解決に向かって取り組むことができるものにする。
- ・ 幼児教育と小学校教育のつながりを意識するために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考にする。

その結果、今年度は特に、「自立心」と「協同性」の育成に着目し、授業の工夫・改善を行うことで課題解決に向かうことができると考え、本主題を設定した。

② 授業実践の共有

全クラスで「自立心」や「協同性」の育成を目指した授業を実践し、毎週1クラスずつその内容を発表した。互いの授業実践を共有する場をつくることで、教職員が研究主題を意識しながら取り組んだり、授業における様々な工夫や視点を得たりすることを目的とした。その場で質問や意見交流も行い、理解も深めた。

(2) 幼稚園みんなで進めるための取組

本園では、子供たちが小学校入学以降も自らの力を発揮し、さらに伸ばしていくためには、幼児期に培った力が重要であると捉えた。そこで、日々の保育をますます充実させることを目指して、暮会でその日の保育について振り返りを行った。どのような子供の姿があったのか、その時自分が見られなかった場面について共有するだけでなく、さらなる育ちや学びのために必要な環境構成や援助について、互いの考えを伝え合い、共通認識のもと次の日の保育へ活かしたり、保育への見方・考え方を広げたりすることができるよう意識して取り組んだ。

(3) 幼保小みんなで進めるための取組

① 幼小合同研修会

年度初めに幼稚園と小学校の教員が同じ場で、幼保小連携の取組や互いの教育の違いについて学ぶ場を設けた。研修会の中では、グループごとにアイスブレイクや意見交流を行う時間をとり、教員同士のつながり

をつくったり、幼稚園教員に小学校でも使える手遊びを紹介してもらうことで幼稚園教員の立ち振る舞いを見て知ったりすることができるように、工夫を取り入れた。

② 保育授業参観

幼稚園教員が小学校へ、小学校教員が幼稚園へ行き、互いの教育や子供の様子を参観する場を設けた。参観の際、教員が何を視点に保育や授業を見ればよいのか明確にするために「見取りシート」を作成し、これまで通信や口頭で伝えていた子供や教師の姿を、実際に見て理解を深めることができるようにした。

③ 小学校の公開授業事前検討会への幼稚園教員の参加

今年度は、小学校教員にはまだ馴染みの少ない「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から「自立心」と「協同性」に特に着目して授業実践を行うことになった。そこで、日々その視点で保育を行う幼稚園教員を事前検討会に招き、一緒に模擬授業を行ったり、意見を交流したりした。幼児教育の視点から意見を得られるだけでなく、幼稚園教員が小学校の授業づくりについて知ることができる場とした。

④ 記録物の共有

幼稚園での子供の姿や育ちをまとめたドキュメンテーションや、小学校の授業実践の記録といった日々の教育における記録物を互いに共有した。夏の合同研修の際には、幼稚園教員が実際にドキュメンテーションについて説明する場を設け、幼児教育への理解がより深まるようにした。

⑤ 幼保教職員交流会

昨年度より、派遣教員が船越幼稚園だけでなく他の連携園にも参観に行き、幼児教育への理解を深めたり、幼児教育に携わる教職員との関係をつくったりしてきた。その中で、園によって環境や保育の在り方が異なることや、反対に日々子供を思い保育をしていること、悩みながら保育をしていることは同じだと分かった。そこで、連携園の教職員が集まり、相談や情報共有をしたり、同じ子供像を掲げて保育を進めたりすることができる交流や関係づくりの場が必要であると思い、実施した。会議のような発言しにくい雰囲気ではなく、気軽に互いの思いや考えについて交流・共有することができる雰囲気となるよう心掛けた。



(4) スタートカリキュラム

本校では、子供たちが学校や教師などの周りの環境に対する「安心」を土台に、小学校生活での様々な活動を通して「成長」し、さらには「自立」していくことを目指してカリキュラムを編成した。さらに、この三段階を参考に5日ごとのめあてを設定し、担任が何を意識すればよいかを明確にした。

① 関わりや環境、活動の工夫

スタートカリキュラムに設定された活動、指導を行うだけでなく、「気持ちが伝わる表情」や「子供と同じ目線の高さで」といった接し方の工夫、子供たちが楽しく安心した雰囲気でも過ごせる掲示物、見通しをもって活動に取り組むための視覚支援といった環境の工夫、読み聞かせや友達と触れ合う活動などの幼児教育を意識した活動を取り入れるといった工夫を行った。

② ゲストティーチャー授業

入学して間もない児童が、連携園の先生に来てもらい幼児期に親しんだ活動を一緒にすることで楽しく過ごしたり、担任以外の小学校の先生と出会い、知ることによって安心したりすることを目的として行った。授業の始めの15分間をゲストティーチャーの先生にお願いし、残りは1年生の授業参観の時間とした。子供たちが安心できるだけでなく、小学校教諭は連携園の先生の子供たちへの接し方について見て学び、連携園の先生は小学校の学習の様子や、卒園後の子供の様子を知るなど、教職員にとっても学びのある有意義な場となった。



(5) その他交流活動や体験活動等の充実

① 交流活動

園児と小学生の交流活動として、大休憩の園庭開放交流、運動会の練習交流、異年齢交流会等を実施した。園児にとっては小学生と関わることで、親しみを持ち、憧れの存在となるように、小学生にとっては年下の子供と関わることで、思いやりの気持ちや相手に合わせた接し方を考え、学ぶ機会にすることができることを目指した。



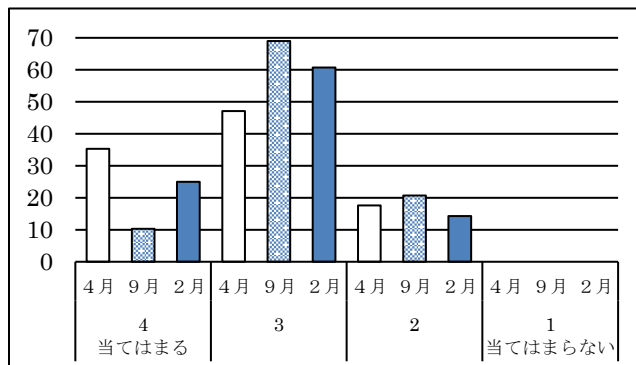
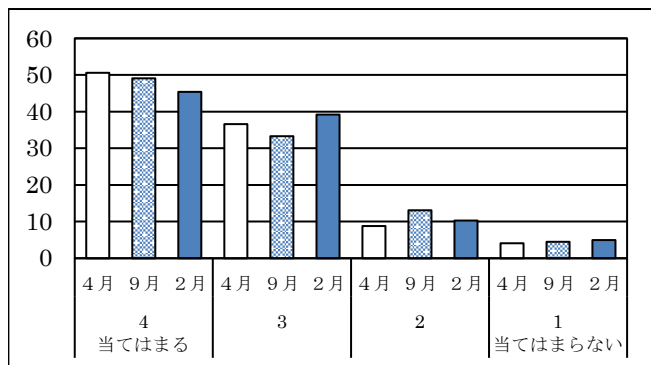
② 体験活動

園児が小学校の生活を知ったり、体験したりする活動として、給食体験、学校探検、校庭遊び、小学校のプールでの水遊び、登校体験等を実施した。小学校の様子を実際に見たり、行く回数を重ねたりすることで、子供たちの不安を解消したり、小学校生活への安心や期待の気持ちをもつことができるようにした。

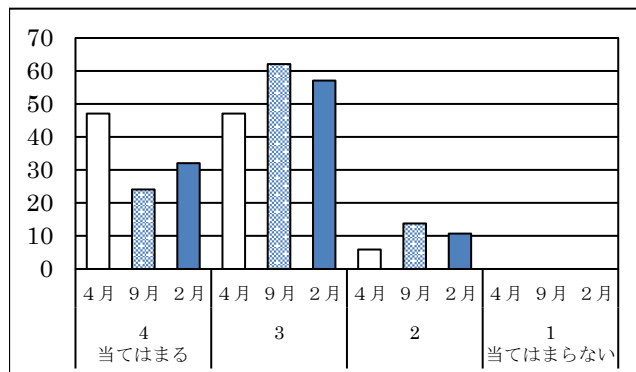
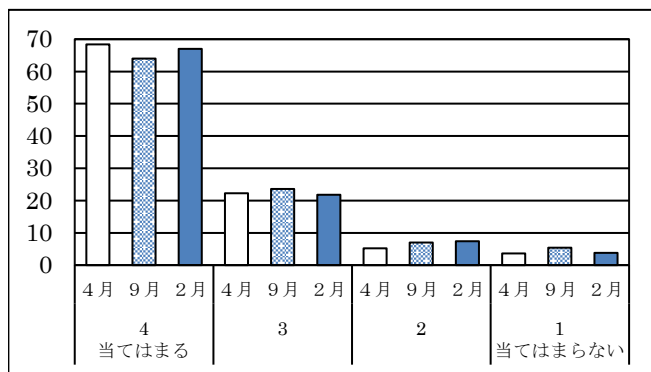
4 検証結果

○自立心・協同性の育成に関するアンケート（令和5年4・9月、令和6年1月／本校児童・教職員対象）

グラフ1：質問①難しいことでも、工夫したり、助けを借りたりして、あきらめずにしている。（左：児童、右：教職員）

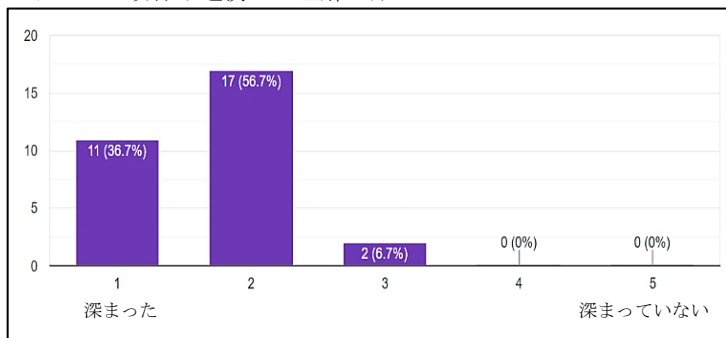


グラフ2：質問⑤お互いのよさを認め合って、友達と楽しく遊んだり学んだりしている。（左：児童、右：教職員）

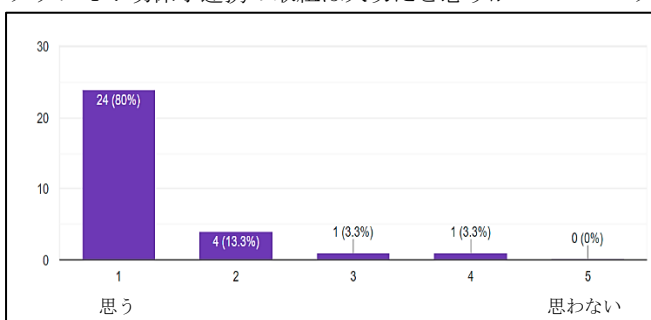


○幼保小連携に関するアンケート（令和6年1月／本園・校教職員対象）

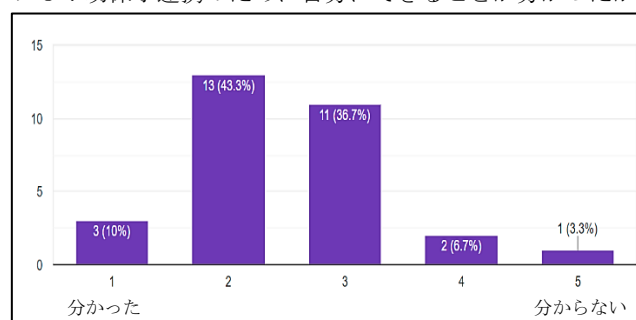
グラフ3：幼保小連携への理解は深まったか



グラフ4：幼保小連携の取組は大切だと思うか



グラフ5：幼保小連携のために自分にできることが分かったか



5 研究成果

(1) 「自立心」と「協同性」の育成について

グラフ1・2より、自立心と協同性の育成については、児童も教職員も、肯定的な回答が4月当初に比べて減少した。教職員の記述回答では、「普段、学習に積極的ではない児童でも、児童同士の関わり合いがある場面では積極的に活動に参加し、やりきって満足する場合が多い。」「友達同士の声かけが増えた。班活動に参加するなど、一緒に何かすることを少しずつ楽しめる児童が増えてきているように感じる。」「個々の課題について説明する時間を十分にとることで、達成感が得られやすい様子が見られた。」等、自立心や協同性を育む授業の工夫を意識・実践してきたことによる手応えを感じていることがうかがえる。しかし、その結果がアンケート結果に反映されていない要因としては、「自立心」、「協同性」を育てるための授業の工夫例を共有していたが、どの程度取り組むか、どのように授業に取り入れるかは教員それぞれに委ねていたため、期待された成果が出なかったと考えられる。研究主題への理解を深める研修をより充実させたり、学年あるいは学校全体で統一した具体的な取組を行ったりする必要があったと考えられる。

(2) 持続可能な取組のためにできること

幼保小連携のために行うことができる取組は多くある。この2年間様々な取組を行い、園児の就学への安心につながったり、教員間の幼保小連携への理解を深められたりしたことから、他園・校へも広めたい取組は多くある。しかし、各園・校で行事や学習が他にも多くあり、その地域の実態や環境を考慮した際に、実施や継続が難しい取組もある。また、来年度以降は本園・校において派遣教員という加配がなくなり、他園・校と同じような条件下で幼保小連携に取り組んでいかなければならない。そこで、本園・校では、この2年間で行った取組を振り返り、「加配教員がいなくてもできること」、「加配教員がいないと難しいこと」、「工夫すれば実施ができそうなもの」に分けた。そして、持続可能な取組を実践するために、園・校で役割を明確にし、ねらいを園・校で互いに確認した上で内容について検討する場をつくる必要があると考える。加えて、活動の実施後には振り返りを行って次の活動に向けた改善を行うことで、この2年間で培った取組を持続していきたい。

(3) 学校みんなで幼保小連携に取り組むために必要なこと

本園・校では、幼保小連携を行う理由を「子供たちが、小学校以降の生活において、幼児教育で培ってきた力を発揮しながら、さらなる成長を遂げるため」とした。そのためには、年長児と1年生担任だけで行うのではなく、「みんなで」幼保小連携について学び、取り組む必要がある。

グラフ3より、本園・校の約9割の教職員が幼保小連携への理解を深めることができたと分かる。その理由として、「幼稚園参観を通して、幼稚園教育の実際を見ることができたので、1年生が0からのスタートではなく、幼稚園・保育園の延長上に小学校があるという意識を自分自身に定着できた。」や「授業を参観する機会もあり、1年生の姿を実際に見ることで、幼児期にどのような力を育むべきか気付くきっかけになった。」ということが挙げられた。研修や参観、通信や記録物を通しての情報交換など、互いの教育について知ったり、実際に見たり、教員同士と一緒に学んだりする機会を、1年間を通して設け、積み重ねたことで、教職員の幼保小連携への理解が深められることに有効的であったと考える。このことに加え、幼稚園では毎日の暮会で保育の振り返りを行ったこと、小学校では毎週の暮会で授業実践の共有をしたことで、研究主題や幼保小連携に日々意識を向けながら取り組むことにつながったと確信している。それゆえ、来年度以降、教職員の幼保小連携への理解や意識を深めるための場、さらに幼保小の教員がつながり、幼保小連携を円滑にするための場をどのように設定するのか検討していかなければならない。

また、グラフ4より、幼保小連携の取組は大切だと考える教職員は9割以上を超えているものの、グラフ5より、実際に個々でしていくべきことを十分に理解している段階には到達できていないと言える。学校全体で取り組む内容については、交流活動や合同研修会など具体的に挙げられるが、自分個人としてできることと問われると、明確にはイメージできていない教職員も少なくないようだ。確かに、年長児や1年生の担任以外の教職員には、「小学校に向けて年少クラスでできること」、「幼児教育を踏まえて6年生の授業でできること」と問われても、明確に答えを出すことは難しい。「みんなで幼保小連携に取り組む」とはどういうことなのかを明確にし、伝える必要があった。毎年教職員の入れ替えもある中で、まずは互いの教育への理解を深めることができる資料をつくり、日々の実践について伝え合える場を設け、取り組むことの利点や必要性を全ての教職員が感じられなければならない。また、互いの教育について理解したことや気付いたことを、自分自身がどのように活かすことができるのかを考える場をつくり、一人一人の教員が日々の教育活動の中で、幼保小連携のために取り組んでいくことを明確にもち、実践していくことができるようになることが必要であると考えられる。